

佳作

おばあちゃんの話

岐阜県 帝京大学可児小学校六年 塚本 もえ

「生まれてくる子どもはみな親を選べない。また、親も子どもを選べない。その家に生まれて幸せなのか不幸なのかを決めるのは子ども次第だ」。そう教えてくれたおばあちゃん。実際に子どもころ、そう感じたらしい。

おばあちゃんは、福井のあるお寺の家に生まれた。当時、お坊さん・お医者さん・先生・議員さんの家はとても裕福だったらしい。おばあちゃんは、自分の部屋もオルガンもあった。小学校に通っていた子はほとんどが農家の子だった。その子たちは、お寺の子だったおばあちゃんがとてもうらやましかった。おばあちゃんのことを雲の上の人だとも思っていたみたいだ。

それから六十年が経ってから、同窓会が開かれた。おばあちゃんは、「久しぶり。元気でよかったね」

や、「会えてうれしい」とみんなに言ってもらえると思いい、楽しみに向かった。でも、行くときんなはおばあちゃんに対しての接し方が冷たかったようだな。なぜだろう。その疑問は、みんなと話していくうちに少しずつ分かってきた。それは、小学生ころのおばあちゃんに対する「うらやましい」という気持ちだ。「ねたみ」に六十年の間で変わってしまったからだ。それだけ子どもころのつらかった記憶が忘れられなかったのだろう。同窓会でおばあちゃんはこのことだけを言った。

「子どもは産まれてくる家を選べない。お寺に産まれたら思って産まれてきたんじゃないんだよ。人はみんな平等なんだよ。」

そうしたらみんなは分かってくれたようだ。みんなはおばあちゃんが、仕事をしなくても優雅に暮らしていると思っていた。けれど、現実はお友達は看護婦長となり、幸せに暮らし、おばあちゃんも人のために朝早くから夜遅くまで働いている。

「人はみんな平等」と言ったおばあちゃんの言葉にはおばあちゃんがお寺に生まれたから一生楽で幸せな人生を送れたというわけではない。お友達が農家に生まれたからといってずっと大変な暮らしを送

ったわけではない。人は自分の生き方は自分で決めることができるということが込められていた。「家
がらや親にたよらず、自分の道は自分で切り開こ
う」。おばあちゃんの話は私にそう教えてくれた。